

かちかち山

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんがいつも畑はたけに出て働はたらいていますと、裏うらの山から一ひききの古ふるだぬきが出てきて、おじいさんがせつかく丹たん精せいをしてこしらえた畑はたけのものを荒あらした上に、どんどん石いしころや土つちくれをおじいさんのうしろから投なげつけました。おじいさんがおこって追おっかけますと、すばやく逃にげて行ってしまいます。しばらくするとまたやって来て、あいかわらずいたずらをしました。おじいさんも困こまりきつて、わなをかけておきますと、ある日、たぬきはとうとうそのわなにかかりました。

おじいさんは躍おどり上あがって喜よろこびました。

「ああいい気味きみだ。とうとうつかまえてやった。」

こう言いって、たぬきの四よつ足あしをしぼって、うちへかっいで帰かえりました。そして天てん井じょうのはりにぶら下さげて、おばあさんに、

「逃にがさないように番ばんをして、晩ばんにわたしが帰かえるまでにたぬき汁じるをこしらえておいておく

れ。」

と言いのこして、また畑へ出ていきました。

たぬきがしばらくぶら下げられている下で、おばあさんは白を出して、とんとん麦を
ついていました。そのうち、

「ああくたびれた。」

とおばあさんは言いつて、汗をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下がっ
ていたたぬきが、上から声をかけました。

「もしもし、おばあさん、くたびれたら少しお手伝いをいたしましょう。その代わりこの
縄をといて下さい。」

「どうしてどうして、お前なんぞに手伝ってもらえるものか。縄をといてやったら、手伝
うどころか、すぐ逃げて行ってしまいうだろう。」

「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今さら逃げるものですか。まあ、ためし
に下ろしてごらん下さい。」

あんまりしつこく、殊勝らしくたのむものですから、おばあさんもうかうか、た
ぬきの言うことをほんとうにして、縄をといて下ろしてやりました。するとたぬきは、

「やれやれ。」

としぼられた手足をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言いながら、おばあさんのきねを取り上げて、麦をつくふりをして、いきなりおばあさんの脳天からきねを打ち下ろしますと、「きやつ。」という間もなく、おばあさんは目をまわして、倒れて死んでしまいました。

たぬきはさつそくおばあさんをお料理して、たぬき汁の代わりにばあ汁をこしらえて、自分はおばあさんに化けて、すました顔をして炉の前に座って、おじいさんの帰りを待ちうけていました。

夕方方になつて、なんにも知らないおじいさんは、

「晩はたぬき汁が食べられるな。」

と思つて、一人でここにこしながら、急いでうちへ帰つて来ました。するとたぬきのおばあさんはさも待ちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいんなさい。さつきからたぬき汁をこしらえて待っていましたよ。」

と言いました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

と言いながら、すぐにお膳ぜんの前に座すわりました。そして、たぬきのおばあさんのお給仕きゅうじで、

「これはおいしい、おいしい。」

と言つて、舌したつづみをうつて、ばばあ汁じゅうのおかわりをして、夢中むちゅうになって食たべていました。それを見てたぬきのおばあさんは、思おもわず、「ふふん。」と笑わらうひょうしにたぬきの正しょうたい体を現あらわしました。

「ばばあくつたじじい、

流ながしの下ほねの骨みを見ろ。」

とたぬきは言いいながら、大きなしつぽを出だして、裏口うらぐちからついと逃にげていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰こしをぬかしてしまいました。そして流ながしの下のおばあさんの骨ほねをかかえて、おいおい泣ないていました。

すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

と言つて、これも裏の山にいる白うさぎが入つて来ました。

「ああ、うさぎさんか。よく来ておくれだ。まあ聞いておくれ。ひどい目にあつたよ。」
 とおじいさんは言つて、これこれこういうわけだとすっかり話をしました。うさぎはた
 いそぎの毒が、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつととつて上げますから、
 安心していらつしやい。」

とたのもしそうに言いました。おじいさんはうれし涙をこぼしながら、

「ああ、どうか頼みますよ。ほんとうにわたしはくやくつてたまらない。」

と言いました。

「大丈夫。あしたはさつそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合せてやります。しば
 らく待つていらつしやい。」

とうさぎは言つて、帰つていきました。

さてたぬきはおじいさんのうちを逃げ出してから、何だかこわいものですから、どこへも出ずに穴にばかり引つ込んでいました。

するとある日、うさぎはかまを腰にさして、わざとたぬきのかくれている穴のそばへ行つて、かまを出してしきりにしばを刈っていました。そしてしばを刈りながら、袋へ入れて持つて来たかち栗を出して、ばりばり食べました。するとたぬきはその音を聞きつけて、穴の中からのそのそはい出してきました。

「うさぎさん、うさぎさん。何をうまそうに食べているのだね。」

「栗の実さ。」

「少しわたしに出来ないか。」

「上げるから、このしばを半分向こうの山までしょっていっておくれ。」

たぬきは栗がほしいものですから、しかたなしにしばを背負って、先に立つて歩き出しました。向こうの山まで行くと、たぬきはふり返つて、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか。」

「ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずんずん先に立つて歩いていきました。やがてもう一

つ向^むこうの山まで行くと、たぬきはふり返^{かえ}つて、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗^{ぐり}をくれないか。」

「ああ、上^あげるけれど、ついでにもう一つ向^むこうの山まで行っておくれ。こんどはきつと上^あげるから。」

しかたがないので、たぬきはまた先^{さき}に立^たつて、こんどは何^{なん}でも早^{はや}く向^むこうの山まで行きつこうと思^{おも}つて、うしろもふり向^むかずにせつせと歩^{ある}いていきました。うさぎはそのひまに、ふところから火^{ひう}打ち石^{いし}を出^だして、「かちかち。」と火をきりました。たぬきはへん^{おも}に思^{おも}つて、

「うさぎさん、うさぎさん、かちかちいうのは何^{なん}だろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

と言^いつて、たぬきはまた歩^{ある}き出^だしました。そのうちにうさぎのつけた火が、たぬきの背^せ中^{なか}のしばにうつつて、ぼうぼう燃^もえ出^だしました。たぬきはまたへん^{おも}に思^{おも}つて、

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼういうのは何^{なん}だろう。」

「向^むこうの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが言ううちに、もう火はずんずん背中に燃えひろがってしまいました。たぬきは、

「あつい、あつい、助けてくれ。」

とさけびながら、夢中でかけ出しますと、山風がうしろからどつと吹きつけて、よい火が大きくなりました。たぬきはひいひい泣き声を上げて、苦しがつて、ころげまわつて、やつとのことで燃えるしばをふり落として、穴の中にかげ込みました。うさぎはわざと大きな声で、

「やあ、たいへん。火事だ。火事だ。」

と言いながら帰っていきました。

三

そのあくる日、うさぎはおみその中に唐がらしをすり込んでこうやくをこしらえて、それを持ってたぬきのところへお見舞いにやって来ました。たぬきは背中大やけどをし

て、うんうんうなりながら、まっくらな穴あなの中にころがつていました。

「たぬきさん、たぬきさん。ほんとうにきのうはひどい目にあつたねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目にあつたよ。この大おおやけどはどうしたらなおるだろう。」

「うん、それでね、あんまり氣きの毒どくだから、わたしがやけどにいちばん利きくこうやくをこしらえて持つて来たのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さつそくぬつてもらおう。」

こういつてたぬきが火ぶくれになつて、赤あか肌はだにただれている背せなか中なかを出だしますと、うさぎはその上に唐とうがらしみそをとどこかまわすこてこてぬりつけました。すると背せなか中なかはまた火がついたようにあつくなつて、

「いたい、いたい。」

と言いいながら、たぬきは穴あなの中なかをころげまわつていました。うさぎはその様よう子すを見てにこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴりするののははじめのうちだけだよ。じきになおるから、少すこしの間あいだがまんおし。」

と言いつて帰かえつていきました。

四

それから四、五日たちました。ある日うさぎは、

「たぬきのやつどうしたろう。こんどはひとつ海に連れ出して、ひどい目にあわせてやろう。」

と独り言を言っているところへ、ひよっこりたぬきがたずねて来ました。

「おやおや、たぬきさん、もうやけどはなおったかい。」

「ああ、お陰でたいぶよくなつたよ。」

「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」

「いやもう、山はこりこりだ。」

「それなら山はよして、こんどは海へ行こうじゃないか、海はおさかながとれるよ。」

「なるほど、海はおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬきは連れだつて海へ出かけました。うさぎが木の舟をこしらえますと、たぬきはうらやましがつて、まねをして土の舟をこしらえました。舟ができ上がると、

うさぎは木の舟に乗りました。たぬきは土の舟に乗りました。べつべつに舟をこいで沖へ出ますと、

「いいお天気だねえ。」

「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いながら、めずらしそうに海をながめていましたが、うさぎは、

「ここらにはまだおさかなはいないよ。もつと沖の方までこいで行こう。さあ、どつちが早いか競争しよう。」

と言いました。たぬきは、

「よし、よし、それはおもしろかろう。」

と言いました。

そこで一、二、三とかけ声をして、こぎ出しました。うさぎはかんかん舟ばたをたたいて、

「どうだ、木の舟は軽くて速かろう。」

と言いました。するとたぬきも負けない気になって、舟ばたをこんこんたたいて、

「なあに、土の舟は重くて丈夫だ。」

と言いました。

そのうちにだんだん水がしみて土の舟は崩れ出しました。

「やあ、たいへん。舟がこわれてきた。」

とたぬきがびつくりして、大さわぎをはじめました。

「ああ、沈む、沈む、助けてくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる様子をおもしろそうにながめながら、

「ぎまを見ろ。おばあさんをだまして殺して、おじいさんにばあ汁を食わせたむくだ

」。

と言いますと、たぬきはもうそんなことはしないから助けてくれと言って、うさぎをおがみしました。そのうちどんどん舟は崩れて、あつぶあつぶいうまもなく、たぬきはどうとう沈んでしまいました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

かちかち山

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>